



22130113



**JAPANESE A: LITERATURE – HIGHER LEVEL – PAPER 1**  
**JAPONAIS A : LITTÉRATURE – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1**  
**JAPONÉS A: LITERATURA – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1**

Wednesday 8 May 2013 (morning)  
Mercredi 8 mai 2013 (matin)  
Miércoles 8 de mayo de 2013 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

---

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a literary commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[20 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire littéraire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[20 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario literario sobre un solo pasaje.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[20 puntos]*.

次の文章と詩のうちどちらか一つを選んでコメントリー（解説文）を書きなさい。

## 1.

それは柵で囲まれていた。柵は針金製の茨の生垣だった。この生垣は概して透明であり、内からも外からも見通すことが出来た。この二重に張られた柵と柵との中間は、細長い、無住の、言わば真空地帯だったが、時たま私達は許されて、と言うのは命ぜられて、その中に入り、草をむしったり、鋤き返したりして、その地面を黒々と綺麗に均らしたが、そこには何の種も蒔かれなかった。私達はその

5 黒土の上に、私達のあるいは外から入って来る者の、足跡をつけないように、もしついたらすぐ判るように、いつもそこを清掃しておいた。もしも何らかの足跡がこの罫に発見されるならば、それはあるいは逃亡の、あるいは侵入の証拠であつて、たちまち非常呼集が鳴り響くはずだった。

（私達はこの中間の真空地帯へはいるのが嫌ではなかった。それは、どちらの世界にも属してはいなかった。それは透明な天使の通路だった。そこからは幾つも張られた針金の水平線越しに、内と外の世界が同時に眺められた。私達はその中で自分たちの足跡を綺麗に消しながら後ろ向きに歩いてゆき時折休憩した。そんな時、私達は、もういかなるものからも捉まえられない、言わば死の世界にでも入ったかのような、一瞬奇妙な静寂な感じに襲われ、めいめい沈黙していた。そしてすぐ起き上がつては、またがやがやと作業を始めるのだった。）

10

この地帯に私達は入れられることが、だんだん少なくなつて、終いには完く見捨てられてしまつた。その地面には根強い植物が生えて来て、内と外の区別がつかなくなり、いかなる足跡もとどめないで、その代わりただ草の穂を揺るがして風の通り過ぎるのが見えた。また針金もたるんで来て、ところどころ、人が棘に引つ掛らないで楽に通れるくらいの穴があいたが、修理もされなかった。ただ思い出されたように、針金が元通りに張られたりすると、やがて権威ある者が、検察官たちが私たちの秩序をしらべに来るのに決まつていた、が、概して彼らは、そこまでは見なかった。

15

このように私達に対する警戒はゆるめられた。それは言わば、調教の期間が過ぎたからであろう。私達は、問題は私達自身の内部にあり、柵と言うものはどこにでもあるので、その中にあるのは、幾分退屈ではあるが、しかしある面においては広大されたる、ありふれた人生そのものであると言うことを、だんだん理解したのである。

20

さて、この二重の柵の内側には、内部に向かつて日本語の立て札が立っていた、——（立ち入禁止地帯、近寄る者は射殺さるべし。）このように、私達は広大なる立ち入り禁止地帯に囲まれていて、時には射殺を免れて、その禁止地帯へ入って行つた者もあるが、必ず連れ戻された。私達は、否応なしに、地球をうんと狭めざるを得なかった。それから、柵の外側には外部に向かつて、ロシア語の立て札が立っていた、曰く（近寄るなかれ、射殺するぞ！）そして、この射殺すると言う語は、一人称単数の現在形だった。それであたかも立札そのものが発射するようだったが、実際はこの射殺者は柵の四隅

25

30 にたっている槽の中に棲息していた。

それは四本の高い柱の上に作られた樹上生活者の小屋だったが、その四方の壁は全部が打ち抜かれた空虚な窓だったから、下から見ると、それは天空をはめ込んだ額縁のようで、その中に一人の人間の肖像が見えていた。彼は（時間の男）と呼ばれ、一時間ごとに交代したが、交代するやいなや、それは前と全く同じ人物になるのだった。それは一時間ごとに一瞬引っ込んで、すぐ現れる時計の針だった。彼は永遠に続く時間に倦怠を感じ、よく欠伸をしていた。彼は銃を持っていて、射殺するためにそこにいたのだが、この死神はついに発動する機会がなかった。彼の手をまたずして、結構、人々は死んで、時間外に放り出された。

夜になると、この檣の上に探照灯のような電燈が点され、それは四つの方角から輝いて、柵の中の世界を明るくすると共に、外の世界を一層暗い闇のように見せ、殊にその真下は深い暗黒だった。そこには何が潜んでいるか判らなかつたが、相愛わず（時間の男）がそこに退屈していたようだ。彼は眼を光らして物を見ながら、決してその姿を見せない暗黒の怪物だった。

（長谷川四郎 シベリヤ物語より『小さな礼拝堂』一九五二年）

（注）

探照灯

サーチライトのこと

2.

### 結婚行進曲

- 沁<sup>し</sup>みるような  
くだものの匂いが風にいりまじりつと  
花嫁のベールが そそと  
動くような動かぬようなつと  
5 森ではけものが背中をなめようと  
くびをうしろへめぐらしつと  
祝辞が次から  
次へと進められてつと  
伯父は花嫁のうなじを盗み視てつと  
10 新郎の課長が  
自社の製品のピアールを織りませて  
スマートなスピーチを  
やつてのけつと  
一夫一婦を守るのは  
15 蛙<sup>と</sup>と<sup>か</sup>蜥<sup>け</sup>と狐だけつと  
サナダムシは己れが体節ごとの  
雌雄のセックスで自己交接して  
一生を終わるつと  
花嫁はふと恋人の冷たさと熱さの  
20 いりまじった口もとを思いだしつと  
花婿は厚生年金の番号を思い出しつと  
河ではワニが白腹を青空<sup>あざ</sup>に曝しつと  
枝が折れた途端  
いい匂いが河の上にひるがっつと  
25 街では靴がよく売れてつと  
祝辞が次から  
次へと進められつと  
新郎新婦にハナムケのコトバつと  
夫は妻の料理を賞<sup>ほ</sup>め時折花を買って  
30 帰れつと  
おお南の島から巨花を船いっぱい買って  
帰れつと

- 男はつきあいが多いのでありましてつと  
仲人の<sup>なごうと</sup>伯母はふと下をむきつと
- 35 よい事 次にはわるい事  
わるい事の次にはよい事があるつと  
晴れてりや星も出るだらうつと  
盗作の祝辞が次から  
次へと進められつと
- 40 ご両家のご希望で  
新婚旅行出立の見送りは謝絶します  
おお誰が見送るものかつと  
新婚旅行は秘密にしとけつと  
よく判らないことはすべて
- 45 魅力的なものだつと  
海では波が水平線へ進んでいき  
海の上の空を波で埋めつくそうと  
してるつと  
花婿は海水パンツを買っておけつと
- 50 突然海に行きたくなるぞつと  
さあこれからが大変だつと  
ひとりつきり  
がうばわれるのだぞつと  
死んだ鳥刺すようなりわが女房つと
- 55 知らないよつと

(川崎洋 詩集『木の考え方』一九六四年)